

動能交替の語彙操作*

中 本 武 志

1. 動能交替

英語には、動能交替 (conative alternation) の名で知られる現象がある。例えば、Levin (1993: 41-42) は次のような例文を挙げている。

- (1) a. Paul hit (at) the fence.
- b. Margaret cut (at) the bread.
- c. I pushed (at/on/against) the table.
- d. Janet broke (*at) the bread.
- e. Monica touched (*at) the cat.

(1a, b, c) の動詞は、他動詞用法のほかに、前置詞を伴う形式も可能である。後者を動能構文という。これに対して、(1d, e)に見られるように、他動詞としてしか用いることができない動詞もある。このことから、この交替にはある種の語彙的特異性が絡んでいるように思われる。¹

本稿では、こうした動能交替の意味特徴を分析するとともに、他言語との比較に基いて、この現象の統語的側面を明らかにしたい。

1.1 英語の動能交替

まず、動能 (conative) という用語について、述べておかなければならない。この語は、「主語が意図的に行う」行為であるとともに、その行為が意図どおりに実現したかどうかは含意されないということを表している。しかし、そのどちらも誤りである。

第一に、主語が「意図を持った行為者」でなくとも、動能構文が可能であることが、van der Leek (1996) によって指摘されている。この点では、Goldberg (1995) の言う「意図した結果 (intended result)」という概念は不適切である。

- (2) a . Deep in thought, Sam was aimlessly cutting away at the bread.
 b . Sam kicked at the dog, though he didn't really intend to hit it.
 c . [Sandy was] sipping at her drink just to be polite.
 d . Nibbling at his moustache, Qwilleran rode down to the main floor.

第二に、岡本(他)(1998)で指摘されているように、動能構文の意味はそれほど単純ではない。筆者の見るところでは、次の五つの意味が存在するようである。²

- (3) Transitive [+motion, +contact] → Conative [+motion]
 a . I beat/hit/strike (at) the fence with the stick.
 b . John shot (at) the elephant.
 c . Mary pounded (at) the metal.
- (4) Transitive [+contact, +affect/change of state] → Conative [+contact]
 a . Margaret cut (at) the bread.
 b . Mary slapped (at) John.
- (5) Transitive [+contact, +holistic] → Conative [+contact, (+repetitive)]
 a . The child pulled at his mother's coat, wanting to be lifted.
 (LDCE³)
 b . Mary scraped (at) the window.
 c . John wiped (at) the mouth.
- (6) Transitive [+contact, +accomplishment/telic] → Conative [+contact]
 a . Tom ate (at) an apple.
 b . I worked (on) the problem.
- (7) Transitive [+contact, +control] → Conative [+contact]
 John rode (on) a camel.

(3)は典型的な動能交替の例である。何らかの打撃を加えることを表す他動詞が、動能構文では実際に的に当たったかどうかまでは含意しない。つまり、「接

触」の意味が消失するのである。

一方(4)の動能構文では、Pinker (1989: 108-109)によると、他動詞にある「接触」の意味は保持されているものの、結果として生じるはずの効果や状態変化が含意されなくなる。(4a)の‘cut at’の場合で言えば、ナイフはパンに当たってはいるけれども、動能構文ではうまく切れているとは言えない。(4b)の‘slap at’では、平手が「ぴしゃり」とは John に当たらなかったことを表している。

(5)の動能構文においても、「接触」の含意は変わらない。むしろ動作の及ぶ範囲が小さくなり、それと同時に、繰り返しが生じることを意味するようになる。³興味深いことに、小さな繰り返しの動作としか解釈されない文脈では、従来、他動詞用法しかないと言われてきた動詞まで、動能構文が可能になることがあり、Pustejovsky (1995: 242) は(9)の例を挙げている。

(8) Monica touched (*at) the cat.

(9) ?Under the table, the cat kept touching at my leg with its front paw.

(6)は(5)の holistic な解釈に近いが、完了相 (telicity) を持っており、Vendler (1967) の分類で言えば完成動詞 (accomplishment verb) であって、(5)の活動動詞 (activity verb) とは異なる。また動能構文で、小さな繰り返しの動作を含意しない点も異なっている。(6b)は抽象的な行為であるが、ここに加えることができよう。すなわち、他動詞では問題の解決までが含意されているが、動能構文では「問題に取り組んでいる」ことしか表現されていないのである。なお、動能交替の可能な完成動詞は珍しく、(6)と同じく incremental theme (Tenny (1994) を参照) の目的語をとる動詞も、動能交替はないのが普通である。

(10) a. Mary built (*at) a house.

b. The gardener ripened (*at) the fruit.

最後の(7)の動能構文においても、問題は「ラクダに乗ろうとしたが乗れたかどうかは含意されない」というような結果に関するのではなく、主語が乗り物を制御しているかどうかの違いである。‘ride’に関しては、辞書では次のような意味の違いを認めている。いずれも(a)が動能構文の、(b)が他動詞構文の解説を抜粋したものである。

(11) OALD⁴

- a. ~on sth; ~away, off, etc sit on a horse, etc and be carried along: *children riding on donkeys* ○ *ride off into the distance* ○ *riding on her father's shoulders*
 ~in/on sth be carried along (in a vehicle) as a passenger: *ride in a bus, on a train, etc* ○ *You ride in the back (of the car) with your brother.*
- b. sit on and control (sth): *ride a pony, bicycle, etc* ○ *a jockey who has ridden six winners (ie winning horses) this session.*

(12) Webster³

- a. to sit and be carried on the back of an animal (as a horse) that one directs and controls
- b. to sit and be carried on while directing and controlling <a jockey who had *ridden* many a winner><rode a bicycle daily to a ripe age>

(13) OED²

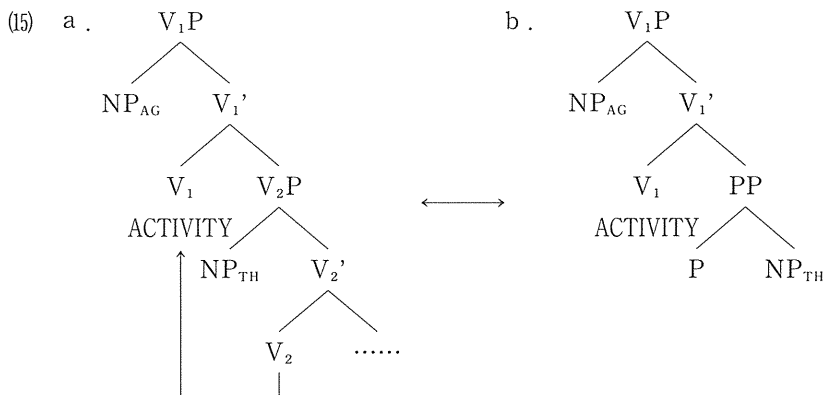
- a. To sit upon, and be carried by, a horse or other animal; to move about, make one's way, or journey upon horseback (or, in mod. use. on a cycle)
- b. To sit on or be carried upon, to go or travel upon (a horse or other animal of burden); to manage or control while seated on

動能構文では他動詞の意味の一部が失われる。(5)のように「繰り返し」の意味が新たに付け加わることもあるが、これはおそらく holistic な意味が失われることの二次的な効果であろう。すなわち、他動詞の場合では、動作の対象に一度くまなくある行為を行った時点で、いったん動作が完結する。しかし、完了のアスペクトはないので、その後その同じ行為を繰り返すかどうかは文脈に応じて自由に解釈できる。一方、動能構文では、対象全体に動作を行うことができないため、動作が完結することがない。従って、繰り返しが含意されるのだと考えられる。⁴

以上の現象を統語的にどう定式化できるだろうか。まず他動詞の意味を「行為」プラス α (=contact, change of state, holisicity, telicity, control) とすると、 α が前置詞 (P) と交替したと考えることができる。

- (14) a. 他動詞: $V_{\text{ACTIVITY}} + V_{\alpha}$
 b. 動能形: $V_{\text{ACTIVITY}} + P$

これをさらに句構造形式で表すと、(15)になる。この表示の特徴は、Larson (1988) 以来の VP shell 仮説⁵ の枠内で、他動詞形と動能形の共通点と相違点が明示的に表せることである。すなわち、動詞の意味が二つに分離されることに伴い、形式的にも VP を分割することにより、動能交替を VP と PP との交替として、表すことができる。なお、他動詞構文の場合には、二つの V は語彙的編入操作によって、一つの動詞として実現する。



V_2 補部には V_2 の意味を補完する要素が現れるものとするが、以下、本稿での分析を進めながら、徐々に精密化していきたい。とりあえずここでは、個々の動詞によって上のような動能交替の有無が異なるので、かなり語彙的な操作であることだけは言うておかなければならない。

それでは次に、他言語の動能交替およびそれに相当する現象について見ておくことにしよう。

1.2 ドイツ語とロマンス諸語

まず英語と同じゲルマン系言語であるドイツ語の検討から始めよう。岡本(他)(1998)によれば、ドイツ語の動能交替はかなりまれな環境でしか用いられないものの、有生性条件や前置詞の選択制限などを満たせば、可能となるこ

とがある。下の例では (16b, c) (17b) が動能形であり、行為の結果は含意されない。

- (16) a. Peter schoß mit dem Gewehr einen Vogel.
 Peter shot with the shotgun a bird
 ペーターは鳥を撃つ（て当て）た。
- b. Peter schoß mit dem Gewehr auf einen Vogel.
 Peter shot with the shotgun on a bird
 ペーターは鳥を狙って撃った。
- c. Peter schoß mit dem Gewehr nach einem Vogel.
 Peter shot with the shotgun toward a bird
 ペーターは(狙いをつけるのが大変なくらい移動している)鳥を狙って撃った。
- (17) a. Peter schlug eine Fliege mit der Klatsche.
 Peter hit a fly with the fly-swatter
 ペーターはハエ叩きでハエを打った。
- b. Peter schlug mit der Klatsche nach einer Fliege.
 Peter hit with the fly-swatter toward a fly
 ペーターはハエ叩きでハエを狙って打った。

しかし、岡本（他）（1998）では(17)に対応する(18)において、実際にテーブルの上が殴りつけられているとしている。ドイツ語の動能交替は英語ほどの頻度はなく、特定の表現でのみ、可能になるのである。

- (18) Peter schlug mit dem Stock auf den Tisch.
 Peter hit with the stick on the table
 ペーターはテーブルの上を棒で殴りつけた。

次にロマンス系言語の場合を考えてみよう。岡本（他）（1998）でも述べられているように、フランス語にはいわゆる動能交替が存在しない。形式的には、直接目的語をとる他動詞用法と前置詞を介した間接目的語をとる自動詞用法が交替する動詞が存在し、語によっては選択制限・位相・様態・ニュアンス等に違いが出ることも多いが、ほとんど自由変異と言ってよい場合もある。⁶しかし

英語のような「結果」などの含意に関する意味変化はない。まず打撃・接触動詞⁷から見ていこう。

- (19) a . Ce joueur de tennis frappe fort la balle. (LDF)
 this player of tennis hits strongly the ball
 このテニスプレーヤーはボールを強く打つ。
 b . Dactylo qui frappe sur les touches (LDF)
 typist that hits on the keys
 キーを叩くタイピスト
- (20) La pluie bat (contre) la vitre. (LDF)
 the rain beats (against) the window
 雨が窓を打っている。
- (21) a . Maman, elle m'a tapé! (GR)
 mama she me-Acc hit
 ママがね、僕をぶったんだ！
 b . Il était délassé et excité d'avoir tapé sur sa femme.
 he was refreshed and excited to-have beaten on his wife
 彼は妻を何度も殴ってストレスを発散し、興奮していた。
- (22) Il ne faut pas toucher les/aux fleurs.
 it NEG is necessary not to-touch the/to-the flowers
 花に触ってはいけません。
- (23) Le chasseur a tiré (sur) le lièvre, mais il a raté le coup.
 the hunter shot (on) the hare but he missed the shot
 猟師はウサギを撃ったが、はずしてしまった。

その他の動詞の「疑似」動能交替でも、接触・結果などの含意についての変化は見られない。

- (24) a . Il habite (à) Paris.
 he lives (in) Paris
 彼はパリに住んでいる。
 b . Il a mordu (dans) une pomme.
 he bit (in) an apple

彼はリングをかじった。

スペイン語やイタリア語では、フランス語のような形式だけの動能交替すら少ないが、若干の動詞に見られる直接他動詞と間接他動詞の交替でも「接触」その他の含意がなくなることはない。スペイン語では次の交替が可能である。

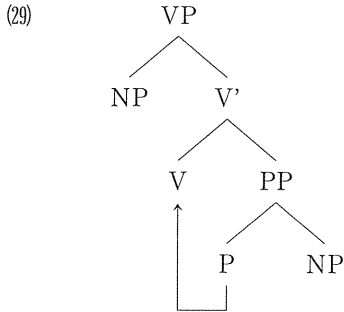
- (25) El granizo golpea (en) los cristales. (DUE)
 the hail beats (at) the glasses
 雹が窓ガラスを打っている。
- (26) a. Habita la casa una familia modesta. (DUE)
 lives the house a family modest
 その家には質素な一家が住んでいる。
- b. Habita en un viejo caserón de las afueras del pueblo.
 (PLANETA)
 s/he.lives in an old big-house of the suburbs of-the town
 彼(女)は町の郊外にある古い大きな屋敷に住んでいる。

イタリア語では以下の交替を示す動詞がある。

- (27) a. La petroliera ha urtato, nella nebbia, un peschereccio. (DLCIC)
 the tanker collided in-the fog a fishing-boat
 タンカーが霧の中、漁船と衝突した。
- b. La petroliera ha urtato, nella nebbia, contro un'altro nave.
 (DLCIC)
 the tanker collided in-the fog against another ship
 タンカーが霧の中、他の船と衝突した。
- (28) abitare (in) una bella casa/(in) un grazioso appartamento. (DLCIC)
 to-live (in) a beautiful house/(in) a gracious apartment
 すばらしい家／瀟洒なアパートに住む

ロマンス語には英語タイプの動能交替は存在しないと言ってよい。詳細な分析は中本(1998a, b)に譲るが、おおむね、下のような前置詞が動詞に編入される操作が任意に適用されるのであって、英語の動能交替のように、下位のVPが

PP と交替する現象とは根本的に異なるのである。



次にケルト系のスコットランド・ゲール語 (Scottish Gaelic) の場合を、Ramchand (1997) のデータに基いて考えてみたい。この言語の時制表現には、単純形と迂言形があるが、現在時制では迂言形のみが現れ、助動詞とともに助辞および動名詞が使われる。助辞‘air’は完了相を表し、動名詞の目的語は動詞の左側にあつて、主語と同じ直接格 (direct case) を付与される。助辞‘ag’は未完了相を表し、目的語は動名詞の右側にあつて、属格 (genitive case) を付与される。⁸

- (30) a. Tha Calum ag òl leann.
 be-PRES Calum-DIRECTCASE *ag* drink-VNOUN beer
 ‘I am drinking beer.’
 b. Tha mi air cupa cofaidh à òl.
 be-PRES I-DIRECTCASE *air* cup coffee a drink-VNOUN
 ‘I have drunk a cup of coffee.’

また過去時制では、単純形が完了相を表し、‘ag’を用いる迂言形で未完了相を表す。

- (31) a. Dh’òl Calum leann.
 drink-PST Calum-DIRECTCASE beer
 ‘Calum drank beer.’

b. Bha Calum ag òl leann.

be-PRES Calum-DIRECTCASE ag drink-VNOUN beer

'Calum drank/was drinking beer.'

さて、状態変化動詞の場合、完了相と未完了相の交替が動能交替における意味変化と類似することがある。つまり、'ag'を用いた未完了形が動能文に、単純過去形や'air'による完了形が他動詞文に、それぞれ相当するように見える場合がある。

(32) a. Tha Calum a'gearradh na craoibhe.

be-PRES Calum-DIRECTCASE ag cut-VNOUN the trees-GEN

'Calum is cutting/cuts at the tree.'

b. Tha Calum air na croabhan a gearradh.

be-PRES Calum-DIRECTCASE air the trees 3RD cut-VNOUN

'Calum has cut the trees.'

(33) a. Bha Calum a'gearradh croabh.

be-PST Calum-DIRECTCASE ag cut-VNOUN tree-GEN (?)⁹

'Calum cut at/was cutting a tree.'

b. Gheàrr Calum croabh.

cut-PST Calum-DIRECTCASE tree-DIRECTCASE

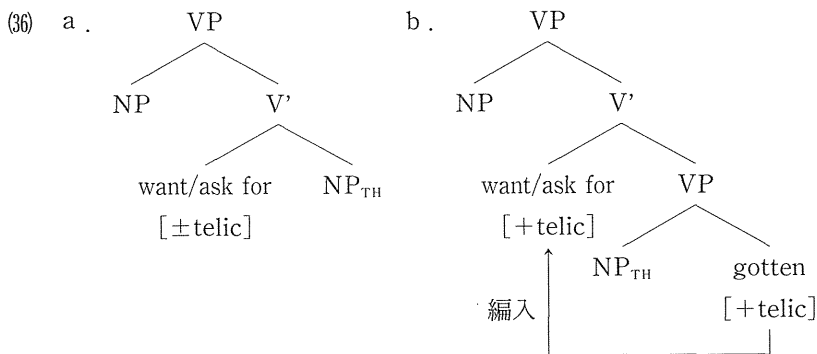
'Calum cut a tree.'

先に、(6)に挙げた英語の'eat'について、動能交替では完了 (telic) の意味が失われ、未完了の解釈がなされると述べたが、これが正しければ、動詞の意味交替が Aktionsart に影響を与えたことになる。それに対して、スコットランド・ゲール語における類似の交替は、語彙的な相ではなく、文法的なアスペクトに関わるものである。¹⁰ 生産性の点から見ても、両者は区別しなければならない。従って、英語の動能交替のような句構造表示は、スコットランド・ゲール語におけるアスペクト交替には適用できない。

しかし、ここに興味深い動詞がある。Ramchand (1997) によれば、'iarr-'という動詞は、未完了相では'want'の意味である一方、完了相では「要求行為」の完了も意味し得るが、'(ask for and) get'の解釈も可能である。

- (34) a. Tha mi air am ball iarraidh
 be-PRES I-NOM *air* the ball-DIRECTCASE want-VNOUN
 'I asked for/got/*wanted the ball.'
- b. Tha mi ag iarraidh a'bhuiil
 be-PRES I-NOM *ag* want-VNOUN the ball-GEN
 'I want the ball.'
- (35) a. Dh'iàrr e not.
 want-PST he-DIRECTCASE pound
 'He asked for/got/*wanted a pound.'
- b. Bha e ag iarraidh not.
 be-PST he-DIRECTCASE *ag* want-VNOUN pound
 'He wanted a pound.'

この動詞の場合、「欲している」という状態は未完了アスペクトで表し、「要求する」という行為は完了相で表されるという点は他の動詞と平行しており、文法的アスペクトとして扱える。しかし、完了相で、「手に入れる」という意味が生じるのは、語彙的特異性に属する。本稿では、英語の動能交替との整合性を考慮に入れて、次のように考えることにしよう。スコットランド・ゲール語の動詞*'iarr'*は、「求める」という意味と「得る」という二つの意味に分解できるが、後者は任意の要素である。「求める」の方は状態・行為いずれにも解釈可能であり、完了・未完了いずれのアスペクトとも共起可能である。それに対して「得る」の場合には、Aktionsart に telic な要素が存在するため、完了アスペクトとしか共起できない。逆に言えば、未完了アスペクトでは「求める」の状態解釈が可能であり、完了アスペクトでは「求める」の行為解釈と「求めて手に入れる」の両義が可能である。¹¹ まとめると、下のようになる。



語に固有の相と文法上のアスペクトとの矛盾により、現れる語義が制限されるという上の分析の根拠としては、語彙的に未完了の Aktionsart を持つために、完了アスペクトとは共起できない動詞が存在することが挙げられよう。(37)は状態解釈しかできない動詞で、(38)は無生物主語により状態解釈が要求される動詞の例である。

- (37) a. Bha e a'coimhead gòrach.
be-PST he-DIRECTCASE ag look-VNOUN silly
'He looked silly.'
- b. *Choimhead e gòrach.
look-PST he-DIRECTCASE silly
'He looked silly.'
- (38) a. Ruith gille seachad.
run-PST boy-DIRECTCASE past
'A boy ran past.'
- b. Bha abhainn a'ruith seachad.
be-PST river-DIRECTCASE ag run-VNOUN past
'A river ran past.'
- c. *Ruith abhainn seachad.
run-PST river-DIRECTCASE past
'A river ran past.'

以上、スコットランド・ゲール語の分析をまとめると、次の通りである。この言語には英語と同じ動能交替は見られない。一見、類似の現象と見えるものも文法上のアスペクト交替によるもので、英語の語彙的な相の交替とは峻別しなければならない。しかし‘iarr-’という動詞の分析に関しては、動能交替と同じ、語義の分割によって説明することができる。

1.3 印欧語族以外の主格一対格言語

印欧語族以外の言語として、まずフィンランド語を見てみよう。フィンランド語の目的語は、肯定文の場合、分格 (partitive) と対格¹² の二つが可能であるが、目的語への物理的影響が全くないか小さい場合、あるいは行為が完了していない場合のいずれかでは分格が用いられる。以下、Karlsson (1987: 80) から用例を引こう (逐語訳は中本による追加)。まず(39)の心理動詞では、目的語には物理的影響がないので分格が使われる。(40)では「意図した結果」に至らず、的に当たらなかったか、当たっても死ななかった時に分格が現れる。(41)では行為の完了・未完了の違いによって、それぞれ対応する格が異なっている。(42)では数量の限られていない不定名詞句が分格で実現している。この点については、2.4節で詳しく取り上げることにし、ここでは量の限定がない以上、完了の解釈ができないことからの当然の帰結である、と言うにとどめておく。

- (39) a. Minä rakastan sinua!
I love you-PART
‘I love you!’
b. Suomi kiinnostaa minua.
Finland interests me-PART
‘Finland interests me.’
- (40) a. Presidentti ampui linnun.
president shot bird-Acc
‘The president shot (and killed) a/the bird.’
b. Presidentti ampui lintua.
president shot bird-PART
‘The president shot at (or : shot and wounded) a/the bird.’
- (41) a. Väinö rakensi talon.
Väinö built house-Acc

'Väinö built a/the house.'

b. Väinö rakensi taloa.

Väinö built house-PART

'Väinö was building a/the house.'

(42) a. Ostan jäätelön.

(I) buy ice-cream-Acc

'I ('II) buy an/the ice-cream.'

b. Ostan jäätelöä.

(I) buy ice-cream-PART

'I('II) buy some ice-cream.'

(41)と(42)については、先程まで見てきたスコットランド・ゲール語と同じく、文法的なアスペクトが関係しており、語彙的な英語の動能交替とは同一視できないと思われるかもしれない。しかしスコットランド・ゲール語のアスペクトが構文によって表示されるのに対し、フィンランド語では動詞によって付与される格で表されており、動詞の相を担う部分が格付与にも関わっていると考えなければならない。また(39)(40)との整合性も必要である。従って、ここでも動詞の意味を二つに分割する記述を採用しよう。すなわち、動詞の語義が単なる行為や状態であれば、目的語には部分格を付与するが、状態変化や完成など結果・完了を表す語義が加わると、その新たに加わった要素が対格を付与とするのである。例えば、「探す」という語義に「見つける」という結果・完了的な要素が加われば、対格を付与するし、追加されなければ分格が与えられる。小泉(1983)から用例を挙げる(英語の逐語訳は中本による追加)。

(43) a. Han etsi miehensä joukosta.

she looked-for husband-Acc from-crowd

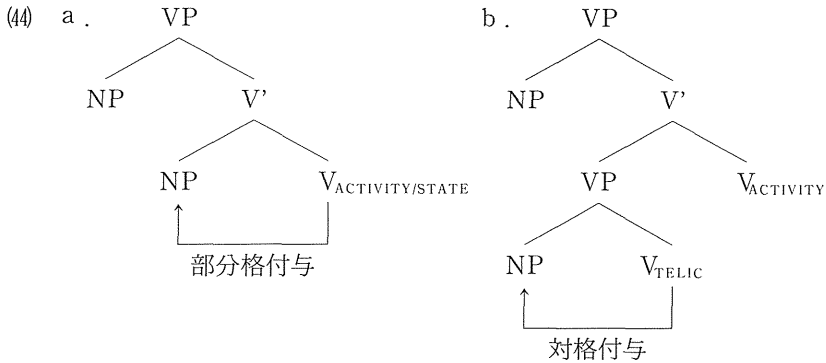
「彼女は人込みの中から夫を探した」(相手を見つけたので結果的)

b. Han etsi miestä joukosta.

she looked-for husband-PART from-crowd

「彼女は人込みの中に夫を探した」(相手を見つけたかどうか不明であって非結果的)¹³

句構造で表示すると、下のようになる。¹⁴



最後に日本語ではどうであろうか。日本語にもし動能交替があれば、対格の「を」が他の助詞と交替する動詞があるはずである。だが、そのような語は見当たらない。

- (45) a. 彼は息子を／＊に／＊へ殴った。
 b. 彼女はパンを／＊に／＊へ切った。
 c. 私はリンゴを／＊に／＊へ食べた。

しかし、類似の現象が岡本（他）（1998）で検討されている。まず locative alternation あるいは spray-paint hypallage などの名称で知られる現象がある。

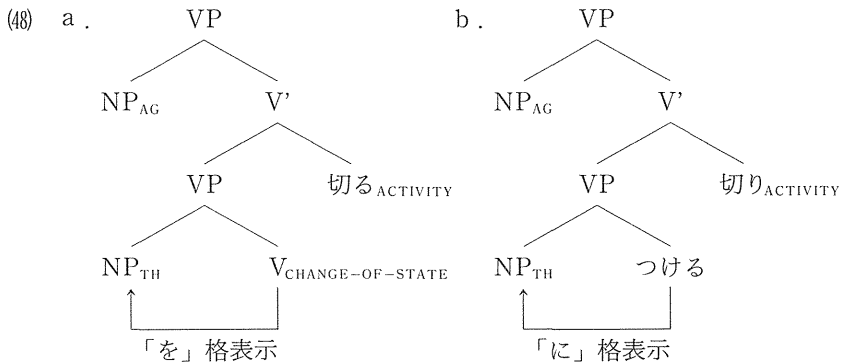
- (46) a. 太郎が壁をペンキで塗った。
 b. 太郎が壁にペンキを塗った。

一般に「壁を」であれば、壁全体がペンキで塗られなければならないが、「壁に」であれば、一部でも塗られていればよい。もしこの解釈が正しければ、格の交替と全体的な (holistic) 解釈が連動しており、動能交替に非常に近いことになる。この点については2.4節で詳しく取り上げる。

もう一つ、動能交替に近い現象として、岡本（他）（1998）は下の例を挙げている。

- (47) a. 小次郎は武蔵を／*に切った。
 b. 小次郎は武蔵*を／に切りつけた。

「切る」と「切りつける」の対応は英語の‘cut’と‘cut at’と同じく、前者は行為の達成が意味に含まれているのに対し、後者にそうした含意はない。ここでは意味の交替を状態変化の語義が「つける」に取って代わられたと記述しておく。



但し、「状態変化」ないし「結果」の部分が必要の要素となる方言がある。小田 (1991) の判断では、次の文はすべて容認可能である (太字は原文)。

- (49) a. この南瓜は堅くて、切りましたが切れませんでした。
 b. 先日、私は家族の写真を撮りましたが撮れませんでした。
 c. 花子は去年買った服を着ましたが着られませんでした。
 d. 私はベッドの上に起きましたが、起きられませんでした。

また、次の文を容認する話者もいる。

- (50) 彼は初球を打ったが、空振りだった。

いずれの文も、筆者を含めて容認しない話者も多い。本稿の考え方に沿って言えば、(49, 50) の動詞は行為と結果が分離しており、結果部分を任意の要素

とする話者のみ、上記の日本語を容認することができるのである。¹⁵

これまで主格—対格言語の動能交替またはそれに類似する現象を見てきたが、次に能格言語を検討することにしよう。

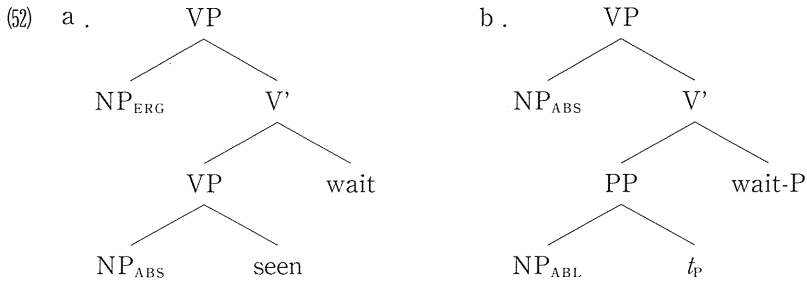
1.4 能格言語

能格言語には、もちろん対格と斜格が交替する動能交替はないが、他動詞の絶対格を持つ目的語が斜格と交替する逆受動 (antipassive) といわれる現象がある。この逆受動構文には様々な特徴があることが知られているが、述語の相に影響を与えることがしばしば指摘されている。すなわち、能動態が完了相を表すならば、逆受動態では未完了を表すことがあるのである。

まず Benua (1995) から、エスキモー語の例を見ることにしよう。ユピック語 (Yupik) では、次の対立があるという。¹⁶

- (5) a. Lucy-m Mary-q utaqallrua
 Lucy-ERG Mary-ABS wait.for-PST-IND.3s-3s
 'Lucy waited for Mary (she fully expected Mary to join her, and Mary did in fact join her after a reasonable amount of time)'
- b. Lucy-q Mary-mek utaqallruuq
 Lucy-ABS Mary-ABLATIVEMODALIS wait.for-PST-IND.3s
 'Lucy waited for Mary (but there is no certainty that Mary did join Lucy, or even that Lucy expected her to do so: Lucy might just have been waiting around on the odd chance that Mary might show up)'

ここでは、スコットランド・ゲール語の 'iarr- (want/ask for)' や、フィンランド語の 'etsia (look for)' とよく似た関係が見られる。注11および13で述べた点とも関連するが、「待つ」と言う行為が完了したからと言って、「相手に会える」という保証も論理的必然性もない。一方、「相手に会う」と言う結果を伴う以上、未完了であってはならない。従って、完了相の能動態では「待つ+会う」、未完了相の逆受動態では「待つ」のみが現れなければならない。Baker (1988) や Bittner & Hale (1996) による逆受動の分析とは若干異なる¹⁷ が、逆受動を P 編入であるとして、本稿では次のように記述しておく。動能交替との類似は明らかであろう。



続いて、西グリーンランド・エスキモー語 (West Greenlandic Eskimo) を取り上げよう。Bittner (1987) によれば、西グリーンランド・エスキモー語の逆受動の形態素には、ゼロ形態素のほかに '-si' 'llir' '-(ss) i' '-nning' がある¹⁸ が、おそらくは起動相 (inceptive aspect) を表す '-llir' を除けば、いずれも未完了を表現し得る。Benua (1995) が Bittner (1988: 68, fn. 6)¹⁹ から引用した例を見てみよう。

- (53) a . Jaakup Aana tuqup-p-aa
 J.-ERG A.-ABS kill-IND.3-3
 'Jacob kills Ann.' (Ann is already dead)
- b . Jaaku Aanamik tuqu-ssi-v-uq
 J.-ABS A.-INS kill-ANTI-PASS-IND-3
 'Jacob kills Ann.' (Ann is not dead yet, but almost)

ここで興味深いのは、逆受動態にすることにより、能動態における結果としての状態変化が含意されなくなることである。やはり行為とその結果は分離できなければならない。

面白いことに、中国語でも同じような例文が取り上げられている。中川 (1992) によれば、次の文は矛盾なく認められるという。つまり中国語の「殺」は「死ぬ」という状態変化を伴う必要がないのである。

- (54) 我殺了他、可是沒殺死他
 「彼を殺したけれど、彼は死ななかった」

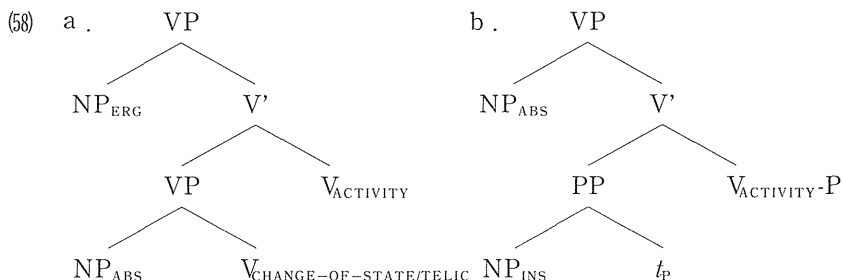
Bittner (1987) によれば、(55)の動詞では、対応する英語が常に完了相を持つ
のに対し、西グリーンランド・エスキモー語では能動態でも未完了の解釈を許
す。従って、完了部分が任意の要素であるかどうかは、言語の恣意性あるいは
語彙的特異性に属すると言える。但し、ゼロ形態素による逆受動態では未完了
の解釈しかない。

- (55) a. Jaakup illu taanna sanavaa.
Jacob-ERG house(-ABS) this-SG.ABS build-TR.INDIC.3SGERG/-3SGABS
'Jacob built/was/is building this house.' (may but need not have
finished)
- b. Jaaku illumik taassuminnga sanavuuq.
Jacob(-ABS) house-INS this-SG.INS build-Ø.ANTIPASS-INTR.INDIC.
3SGABS
'Jacob was/is building this house.' (has not finished it yet)

さらに、能動態では一回限りの行為しか表さない動詞が、逆受動態では繰り
返しが可能になるという。これは他動詞の完了相を担う要素が逆受動形態素と
交替したのだと、考えることができる。

- (56) a. *ullut tamaasa Jaaku malippaa.
days all Jacob-ABS follow-TR.INDIC-3SGERG/3SGABS
('He followed Jacob every day.')
- b. ullut tamaasa Jaakumik malissivuuq/maliivuuq/malinnippuuq.
days all Jacob-INS follow-ANTIPASS-INTR.INDIC-3SGABS
'He followed Jacob every day.'
- (57) a. *qassiriariuni atuagaaq taana aturpaa.
several.times book(-ABS) this-SG.ABS use-TR.INDIC-3SGERG/3SGABS
('He used this book several times.')
- b. qassiriariuni atuakkamik taassuminnga atursivuuq/atuvuuq/atur-
nippuuq.
several.times book-INS this-SG.INS use-ANTIPASS-INTR.INDIC-3SGABS
'He used this book several times.'

従って、ここでも次のような記述が可能であろう。まず、動詞を行為と完了を表示する部分に分離し、西グリーンランド・エスキモー語の‘build’では元々完了要素が任意であるが、特にゼロ形態素による逆受動では、義務的に交替する。動詞と逆受動形態素の選択関係（注17を参照）を考慮すれば、Baker (1988) で提案された通り、逆受動は語彙操作である。



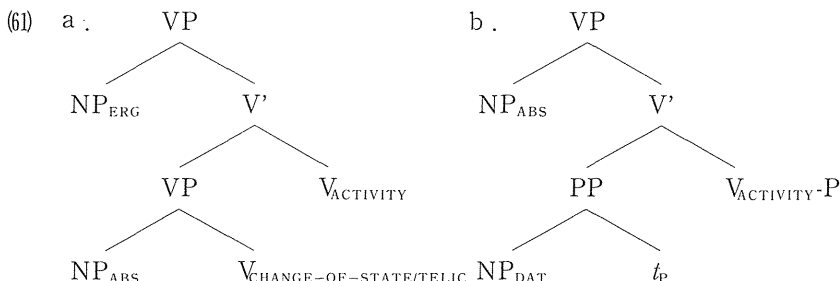
なお、語彙操作のゆえんであろうか、逆受動が必ずしも未完了を表さない場合がある。以下の例では、対象に対する部分的な行為とは解釈されないようである。この点については、西グリーンランド・エスキモー語の今後の研究に期待したい。

- (59) a. Jesusimik takuvuq/takusivuq/takunnippuq/takullirpuq.
 Jesus-INS see-ANTI-PASS-INTR.INDIC-3SGABS
 ‘He saw Jesus.’
- b. atuartunik tamanik oqaloqatiginnissimavuq.
 student-PL.INS all-PL.INS talk.with-ANTI-PASS-PERF-INTR.INDIC-3SGABS
 ‘He has talked with all the students.’
- c. anguminik aalirpuq.
 father-self’s-INS go.to.get-ANTI-PASS-INTR.INDIC-3SGABS
 ‘He went to get self’s father.’

能格言語の分析として、最後にワルピリ語 (Warlpiri) を取り上げよう。Laughren (1988) の分析によると、次のような興味深い対立がある。まず(60)では、まさに英語の‘chop’と‘chop at’の交替と同じである。²⁰

- (60) a. Watiya-rna paka-rnu ngajulu-rlu (jurlarda-ku). (EFFECT)
 tree-1SG chop-PST 1SG-ERG (honey-DAT)
 'I chopped a tree (for honey)'
- b. Watiya-ku-rna-rla-jinta paka-rnu. (CONATIVE)
 tree-DAT-1SG-3DAT-DOUBLE DAT chop-PST
 'I chopped at the tree.'

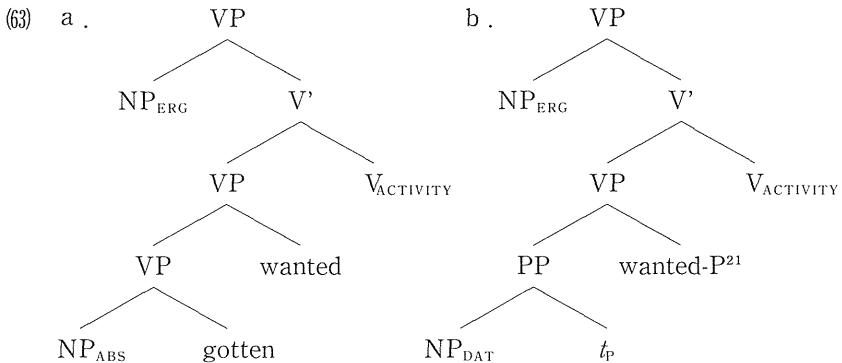
従って、補部の一致形態素や移動を無視すると、次の構造を仮定できる。



(60)の動詞はさらに「手に入れる」という意味を追加でき、これを逆受動態にすることが可能である。

- (62) a. Jurlarda-rna paka-rnu ngajulu-rlu (watiya-rla). (OBTAIN)
 honey-1SG chop-PST 1SG-ERG (tree-Loc)
 'I chopped out the honey (in the tree).'
- b. Jurlarda-ku-rna-rla paka-rnu ngajulu-rlu (watiya-rla). (GOAL DATIVE)
 honey-DAT-1SG-3DAT chop-PST 1SG-ERG (tree-Loc)
 'I chopped for the honey (in the tree).'

(62)はスコットランド・ゲール語の'iarr- (want/ask for)'を思い出せて、面白い。ここでは'iarr-'と同じ構造を持つ動詞が付加され、それがさらに逆受動態になると考えよう。



‘V_{GOTTEN}’が逆受動態で削除されることの傍証として、「得る」と言う動詞自体は逆受動態になれないことが挙げられるかもしれない。態の変更によって‘V_{GOTTEN}’がなくなると、動詞が無意味になってしまうから、という説明が可能であろう。

- (64) a. Karnta-ngku-lu yarla ma-nu.
 woman-ERG-3PL yam get-PST
 ‘The woman got yams.’
 b. *Karnta-ngku-lu-rla yarla-ku ma-nu.
 woman-ERG-3PL-3DAT yam-DAT get-PST
 ‘The woman got for yams.’

1.5 まとめ

本節では、英語の動能交替を出発点として、様々な言語に類似の現象があることを見てきたが、その結果、統一した記述の可能性が示された。すなわち、動詞を行為と接触・結果・完了などを表す部分とに分け、後者がゼロを含む何らかの要素と交替する語彙操作が、非常に多くの言語に見られるのである。動能交替がロマンス諸語には見られず、ドイツ語でも限られた現象でしかないのは、この交替操作が抑制されているからと考えられる。

しかし、接触・結果・完了などを表す要素はロマンス諸語を含む多くの言語で現れることがある。次節では、動詞の意味の分離が決して動能交替の説明のためだけに考えられたものではないことを明らかにしたい。

2. 内項と付加詞

1.1節では、英語の動能交替で失われる意味を、接触・状態変化・全体性・完了・制御の五つに分けた。本節では、動能交替以外の文脈で現れるこれらの意味を検討していくことにする。特に、直接内項が付加詞または間接項と交替する時、こうした意味変化が生じることを示したい。

2.1 接触

本稿で扱う「接触」とは、移動の結果、「着点」に到達することである。初めに、移動動詞の例から見ていこう。多少の個人差はあるものの、「～に行く」と「～へ行く」との間に、次のような違いが認められるようである。

- (65) a. *東京に行ったが、途中で引き返した。
b. ?東京へ行ったが、途中で引き返した。

まず動詞「行く」自体は必ずしも「到着」を含意しない。

- (66) バスは5分前に行ってしまった。

一方、「へ」は「方向」だけではなく、「着点」とも解釈可能であるし、「に」も単なる「方向」を表すことができる。

- (67) ようやく家へたどり着いた。
(68) 荷物を実家に送ったが、届かなかった。

(65)から(68)の対立をすべて認める人の場合、意味解釈に(69)の優先順位があるのだと、考えられる。なお、解釈Aが解釈Bより優先されることを、最適性理論の記述法を採用して、 $A \gg B$ で表している。

- (69) a. 行く：移動+到着 \gg 移動
b. に：着点 \gg 方向
c. へ：方向 \gg 着点

方向の「に・へ」と移動+到着の「行く」、および着点の「に・へ」と移動のみの「行く」は動詞の意味選択とは合わないので、共起できない。従って、可能性としてあるのは、着点の「に・へ」と移動+到着の「行く」、または方向の「に・へ」と移動のみの「行く」の4通りである。

「東京に行く」の場合、助詞も動詞も「到着」が優先的解釈であるから、東京には必ず着いていなければならない。つまり最優先解釈の存在が、順位の低い「東京方面への移動」解釈を抑制するのである。

「東京へ行く」の場合、助詞か動詞のいずれかが、順位の低い解釈をとる必要がある。着点の「へ」と移動+到着の「行く」の組み合わせか、方向の「へ」と移動のみの「行く」の組み合わせである。この時、二つの組み合わせは同列で、これだけではどちらの解釈をすべきか決定できない。従って、語用論的な要因に基いて、実際に東京に着いたのか、着かなかったのかが決められるのである。

なお、(67)の「たどり着く」は必ず到着を表すわけであるから、「へ」が単なる「方向」であってはならない。(68)の「送る」は「行く」とは逆に、移動のみの解釈が移動+到着よりも優先される。従って、方向の「に」と移動の「送る」、着点の「に」と移動+到着の「送る」では、助詞か動詞のいずれか一方が、最優先ではない解釈を強いられることになり、どちらの解釈をすべきかは語用論的に決められることになる。つまり、送ったものが届いたという解釈も、届かなかったという解釈も可能なのである。

ところで、着点の「に・へ」が現れる時、動詞は常に移動+着点であるから、「～に」は動詞に選択された項であると言える。これに対して、移動が必ずしも方向を選択するとは言えない。(66)のように、「バスが行ってしまった」だけで、文法的になるからである。ごく単純に言ってしまうと、着点は直接内項だが、方向は付加詞または間接項である。動能交替における直接目的語とPPの交替に近い。²² もし両者を同列に扱うことができるならば、このように言えるのではないか。動詞が(行為+)移動の要素と到達/接触の要素に分割できるならば、後者は着点を内項として選択する。もし、到達/接触の要素がなければ、着点となる内項は現れず、方向の付加詞ないし間接項が実現し得る。英語の場合、間接項はPPとなる。

日本語の移動動詞では、内項と付加詞の違いがはっきりしないが、フランス語に、二つの違いが着点と方向にそれぞれ対応すると思われる現象がある。フランス語の移動動詞は原形の動詞を従えて、「～するために移動する」という意

味を表す。単に目的を表すだけなら、前置詞‘pour (for) + 不定法動詞’を使うこともできるが、Lamiroy (1983: 55) の言うように、多くの言語学者が‘pour’がなければ、不定法動詞の行為が間違いなく実現されたという強い含意があることを指摘している。(70a)であれば、ジャンはいとこに会えたであろうし、(70b)ならば、新聞は買ったはずである。換言すれば、原形動詞が直接、移動動詞の補部になっている時には着点を表し、前置詞を伴う付加詞の場合には方向を表すのである。²³

- (70) a. Jean est parti (pour) voir sa cousine en Amerique
 Jean is left (for) to-see his cousin in America
 ‘Jean left (in order) to see his cousin in America.’
 b. Jean était descendu (pour) acheter le journal.
 Jean was descended (for) to-buy the newspaper
 ‘John had gone down (in order) to buy the newspaper.’

日仏両言語において、着点は直接内項、方向は付加詞で表されることが分かったが、移動による接触といえ、授与動詞を忘れるわけには行かない。英語の二重目的語構文には、いくつか考慮しなければならない問題があるので、ここではロマンス諸語の例を見ることにする。ロマンス諸語には英語のような語順の変化を伴う交替ではなく、二つの前置詞の交替として現れる。一般に与格 NP は、フランス語では‘à’、スペイン語で‘a’に導かれるが、これらは前置詞というより、実際には与格表示子であり、²⁴ 受益者を表す真の前置詞と交替すると、英語とよく似た含意の相違が生じる。まずフランス語の例を Kayne (1975) から引用する（逐語訳は中本による追加）。

- (71) a. Il achète des jouets aux petits-fils de ses petits-fils.
 he buys ART.INDEF. toys to-the grandsons of his grandsons
 ‘He’s buying toys for his grandchildren’s grandchildren.’
 b. Il achète des jouets pour les petits-fils de ses petits-fils.
 he buys ART.INDEF. toys for the grandsons of his grandsons
 ‘He’s buying toys for his grandchildren’s grandchildren.’
 (72) Il achète cette pierre tombale à/pour son grand-père, qui est mort il y a dix ans.

he buys this tombstone to/for his grandfather that is died ago ten years

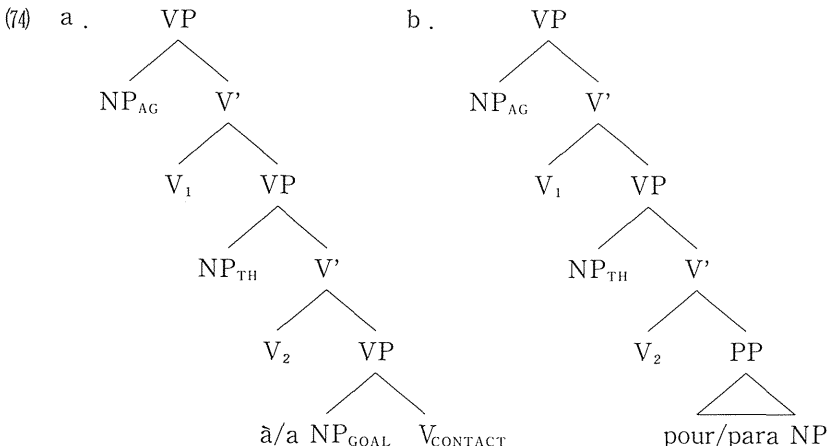
'He's buying that tombstone for his grandfather, who died ten years ago.'

(71)(72)において、'à NP'を使うには、主語と何らの直接的なつながりが必要である。(71)では、まだ生まれていない子孫におもちゃを買うのであれば(b)が、既に孫の孫が存在する大家族であるならば(a)が適当である。(72)で'à NP'を用いると、死者の霊と交信できることになる。

Masullo (1992) から借用した下のスペイン語もほぼ同じことを表している。この場合、斜格'para NP'は与格'a NP'と交替している。²⁵ なお、与格 NP が生じる際には、与格接語代名詞と共起しなければならない。フランス語とスペイン語の授与動詞は、ほぼ(74)の構造を持つことになろう。²⁶

- (73) a. Compro juguetes para sus nietos.
bought toys for his grandchildren
'He bought toys for his grandchildren.'

- b. Les compró juguetes a sus nietos.
them-DAT bought toys to his grandchildren
'He bought his grandchildren toys.'



以上、移動を表す動詞が接触を伴ったり、伴わなかったりする例を見てきた。移動と接触を分離しておく理由が存在することになる。特に接触を表す場合には、着点が直接内項であり、NP ならば構造格を付与されること、そうでない場合には間接項または付加詞が現れ、斜格を付与されることが分かった。

2.2 状態変化・被影響性

状態変化は広義の被影響性(Affectedness)に含まれる概念である。言うまでもなく、被影響性は言語の様々な側面に顔を出す。Anderson (1979) の名詞の受動化に関わる現象を初めとして、中動態 (Keyser & Roeper (1984)) やイタリア語における恣意的解釈の空目的語 (Rizzi (1986))、日本語の遊離数量詞 (三原 (1998))、スウェーデン語の‘have’+過去分詞構文 (Egerland (1998)) などが挙げられるが、その中の一つに受動化がある。Bolinger (1975) や小川 (1981) および安井 (1983) らの分析によれば、変化に焦点をあてた被動の解釈によって容認可能となる受動文がある。

- (75) a. John turned the corner.
 b. *The corner was turned by John.
 c. The corner hasn't been turned yet.
- (76) a. The stranger approached me.
 b. I was approached by the stranger.
 c. The train approached me.
 d. (*)I was approached by the train.

(75c) のような受動態が可能になるにはマラソンの折り返し地点であるというような文脈が必要であり、(76d) が容認されるには、電車で引かれそうになるというような状況でなければならない。また Ross (1973) や安井 (1983) では、受動態の主語が動作主から受ける影響が大きければ大きいほど、容認度が高くなることが確認されている。

- (77) a. The bed has been slept/fought/?hidden/?eaten/??breathed/??
 thought/??dreamt in.
 b. This house/*Virginia/**The earth was lived in by George
 Washington.

c. John is said to be rich by everyone/*by Mary.

これらの例から、「通常は受動化できない動詞でも、その動詞に目的語に影響を与える要素が連結されれば、受動化が可能になる」と言える。もしこの推論が正しければ、前置詞の補部が受動化によって主語になるのは、間接項を直接内項化する操作があるからであり、動詞に新たに加わる状態変化をもたらす要素が直接内項化の役目を担うと言えるであろう。

しかし、実際にはそう単純ではなさそうである。Davison (1980) によれば、このような受動態に付随する意味は状態変化だけではなく、できごとの可能性を示すことがある。

- (78) a. That bridge has been flown under by Smilin' Jack.
 b. This bridge can be flown under by Smilin' Jack.
 c. It is possible for Smilin' Jack to fly under this bridge.
- (79) a. The enemy base has been flown over several times.
 b. The enemy base can be flown over several times.
 c. It is possible to fly over the enemy base several times.
- (80) a. The valley has been marched through in two hours.
 b. The valley can be marched through in two hours.
 c. it is possible to march through the valley in two hours.

これは文全体のモダリティを表しているので、本稿で扱っているような語彙的な操作とはなじまない。あるいは被影響性と可能性の意味は全く異なる二つのレベルで、それぞれ説明すべきなのかもしれない。興味深いことに、文脈によるキャンセルが前者は可能だが、後者は矛盾を生じさせると Davison (1980) は言う。(81)は状態変化を、(82c, d) は可能性表示を無効化した例である。

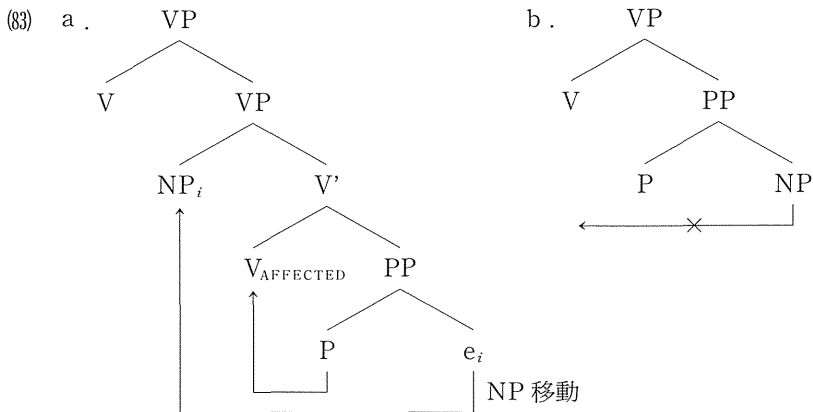
- (81) a. This chair has been sat on by Fred, but there's absolutely no trace.
 b. My hat was sat on, but it's perfectly all right.
 c. This bed may have been slept in by George Washington, but I'm not at all impressed.
- (82) a. This bridge has been flown under by Bob Tuck, but I bet {you

- can't do it/nobody else can} .
- b . This bridge has been flown under by Bob Tuck, but I bet you it can't be flown under by anybody else.
 - c . ???this bridge has been flown under by Bob Tuck, but I bet you that nobody can (ever) fly under it.
 - d . *This bridge has been flown under, but I bet you it can't be flown under. [Not ungrammatical, but contradictory.]

可能性解釈が Davison (1980) の言う通り、論理的な含意 (implicature) であるならば、(82c, d) の矛盾は当然である。語彙的なレベルでの合成である被影響性とは、やはり解釈のレベルが異なると言わなければならない。しかしながら、受動態の状態変化の意味が語彙的なものであるとするならば、語用論的な無効化はあり得ないはずである。では(81)は反例なのであろうか。

Davison (1980) の問題点は、物理的な影響にとらわれていることである。例えば (81a) であれば、実際にフレッドの座った痕跡が皆無であったとしても、「大嫌いなフレッドに椅子に座られた」という心理的ないわゆる adversary な影響があればよい。²⁷ 決して被影響性がキャンセルされたわけではない。従って、語彙的に被影響性の要素が動詞に加えられたとする仮説は十分成り立つと思われる。

それでは具体的に、どのような構造が考えられるであろうか。受動態における目的語の NP 移動がすべて直接内項の位置からであるとする、特に V+P の受動文は(83)のようになるはずである。



(83a)では、Pが V_{AFFECTED} に編入されるため、PPはNP移動の障壁にはならないのであろう。P編入とNP移動により、V+Pが他動詞に等しくなることが記述できる。²⁸

- (84) a. He laughed at and mocked the clown.
 b. John sat on and ruined that chair.
 c. John brushed off and sat on that chair.

さらに、受動分詞と前置詞の間には副詞などが挿入されないことが指摘されている。

- (85) a. *This chair was sat carelessly on.
 b. This chair was sat on carelessly.

これはVがPを編入しているからであるとも、二つのVPの間に付加詞を禁じる制約があるからとも考えられる。どの分析が正しいか、また下位のVP指定部に移動したNPが Θ 基準に違反しないかなど、今後の課題としたい。

もう一つ、状態変化の例を挙げておこう。2.1節で、スペイン語の斜格と与格が交替する構文を見たが、与格NPは斜格NPよりも被影響性が大きいという特徴もある。Masullo (1992)によれば、(86)(87)において、(a)の構文では、それぞ

れ「場所」「所有者」の意味しかない NP が、(b)では何らかの影響を受けたという含みがある。構造分析の詳細は、Masullo (1992) に譲るが、新たに加わった状態変化を担う動詞要素によって、与格が直接付与されたとすると、動詞の間接項である「場所」あるいは名詞の外項である「所有者」が、それぞれ動詞の直接内項に変わったことになる。特に(86)は、斜格の付加詞から直接内項へ、ステータスの変更があったという点で、上で見た V+P の受動態と共通している。

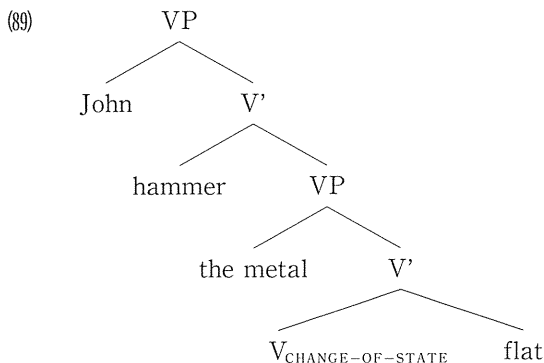
- (86) a. Juan puso azucar en el cafe.
 Juan put sugar in the coffee
 b. Juan le puso azucar al cafe.
 Juan it-DAT put sugar to-the coffee
 ‘John put sugar in the coffee.’
 (87) a. Ensucie el libro de Pedro.
 made.dirty the book of Pedro
 b. Le ensucie el libro a Pedro.
 him-DAT made.dirty the book to P.
 ‘I made Pedro’s book dirty.’

最後に、結果構文 (resultative construction) についても触れておかなければならない。Washio (1997) によれば、いわゆる結果構文は三つに分類される。まずは実際には様態をあらわすだけの見せかけの結果構文 (spurious resultative)、次に動詞自体が変化を含意している弱い結果構文 (weak resultative)、最後に状態変化を意味しない動詞による強い結果構文 (strong resultative) である。それぞれ (88a, b, c) に対応している。

- (88) a. He tied his shoelaces tight.
 b. John painted the wall blue.
 c. John hammered the metal flat.

特に興味深いのが (88c) の文である。ハンマーで叩く行為そのものには、叩かれる対象の状態変化が含まれていないので、結果表現を認可することができないはずである。従って、動詞の意味に状態変化を意味する要素を付加する必要がある。本稿では残念ながら、結果構文を詳しく分析する余裕がないが、状

態変化を担う動詞要素を分離しておかなければならないことは明らかである。ここでは、結果表現を VP 補部に置いておこう。



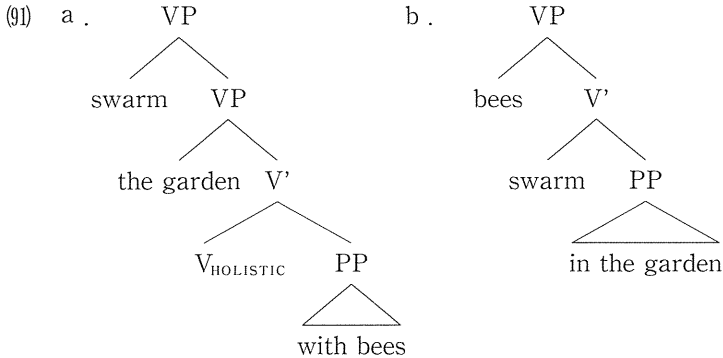
2.3 全体的解釈

同じ動詞であっても、構文によって、ある行為がその対象全体に及ぶという解釈が生じることがある。特に有名なのが locative alternation と呼ばれる現象であるが、これには完了相が伴うので、次節で扱うことにする。

(90)もししばしば取り上げられる例であるが、Legendre(1993)によれば、英語・フランス語共に同じ意味の交替が見られる。つまり (90b, d) では庭は蜂や虫で一杯になっているはずであるが、(90a, b) ではそうでなくても構わない。

- (90) a . Bees swarmed in the garden.
 b . The garden swarmed with bees.
 c . La vermine grouille dans le jardin.
 the vermin swarms in the garden
 d . Le jardin grouille de vermine.
 the garden swarms of vermin

一見、主格と斜格の交替のように見えるが、もし'swarm/grouiller'が非対格動詞であるとするならば、場所 NP が直接内項と間接項ないし付加詞と交替する構文であると分析することができる。²⁹

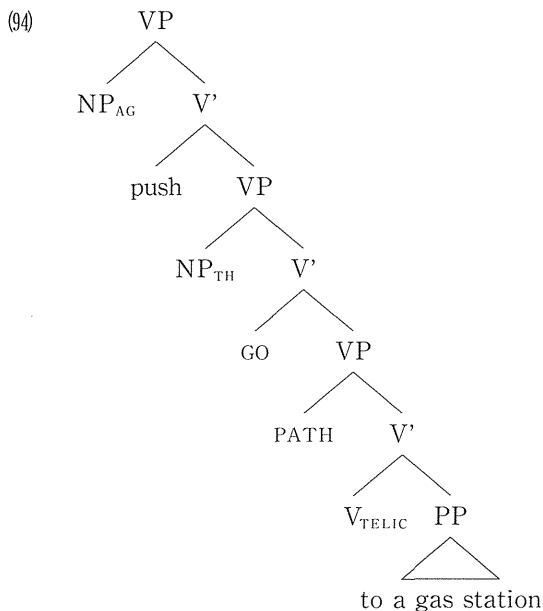


2.4 完了性

活動動詞 (activity verb) が何らかの終着点 (terminus) を表す表現と共に起することによって、完了相 (telicity) を持つようになり、完成動詞 (accomplishment verb) として振る舞うことが知られている。Tenny (1994) で挙げられている例文を見てみよう。

- (92) a . John pushed the car *in an hour/for an hour.
 b . John pushed the car to a gas station in an hour/*for an hour.
- (93) a . Bill rolled the log uphill *in an hour/for an hour.
 b . Bill rolled the log to the top of the hill in an hour/*for an hour.

(92)(93)の場合、「押す」「転がす」という行為に移動を表す要素³⁰ が加わった上に、完了性に関わる動詞要素が付加されることによって、全経路 (path) の移動が表現されることになる。音形のない抽象的な経路があり、着点の PP が結果としての位置を表すとなると、(94)のようになる。



しかし、完了性を担う要素の存在が任意の動詞の場合もあり、当然、完了解釈は任意となる。

(95) a. John played that sonata for hours/in twenty minutes.

a. walk the trail for an hour/in an hour.

c. climb the ladder for an hour/in an hour.

(96) a. [_{VP} NP_{AG} [_{V'} V NP_{TH/LOC}]]

b. [_{VP} NP_{AG} [_{V'} V [_{VP} NP_{TH/LOC} V_{TELIC}]]]

もちろん、完了要素が存在すれば、行為の領域を表示する項目が現れ得るし、逆に言えば、行為の領域を表す表現があれば、完了解釈が現れる。

(97) a. walk the course

b. walk the course through

(98) a. push the cart

- b. push the cart over
- (99) a. [_{VP} NP_{AG} [_{V'} walk [_{VP} the course [_{V'} V_{TELIC} through]]]]
- b. ... [_{VP} the cart GO [_{VP} (PATH) [_{V'} V_{TELIC} over]]]

ここで重要なのは、ある限定された範囲のすべてに対して行われる行為であるということである。前の節で扱った全体的 (holistic) 解釈に近いが、全体的解釈は完了相を欠くという点で異なる。記述上の問題ではあるが、全体性素性に何らかの要素が付け加わったものと言えるかもしれない。だが、その要素が一体何であるのかを決めるのははなはだ困難である。例えば、行為の及ぶ範囲が限定されている点 (boundedness) に注目する人がいるかもしれない。‘eat’であれば、食べるものの量が限定されているか否かで、活動動詞解釈か完成動詞解釈かに分かれるように思われるからである。

- (100) a. John ate an apple in/*for five minutes.
- b. John ate apples for/*in an hour.

さらに、次の例では、リンゴの個数は限定されておらず、完了性を持たないものの、食べられたリンゴに関しては完全に消費されている。すなわち、全体性と範囲の限定性が分離されていると考えられる。逆に言えば、全体性プラス範囲の限定性で完了性が生じている根拠となり得る。

- (101) Bill ate apples.

しかし、実際には(101)の判断は話者によって異なる (Tenny (1994: 32)) し、次のように言えることから、範囲の限定だけでは不十分である。

- (102) William ate the same apple for hours.³¹

(100a)の活動動詞解釈を認める人の場合や(102)では、リンゴが完全に消費されているわけではない。(101)に関しても、リンゴはかじられたただけだという解釈が可能だとする話者もいる。³² もし完了性が全体性プラス範囲の限定性であるとしても、両者は通常は一体であって、分離しにくい。ここでは漠然と、完了性を担う要素が活動動詞と結合すると言うにとどめる。

次に、いわゆる locative alternation を検討しよう。この構文については英語だけでなく、フランス語にも同じことが言える。すなわち、場所が直接目的語になる時には、その場所全体に行為が及んでいなければならない。Legendre (1994: 15) の例を見てみよう。

- (103) a. He loaded the tomatoes on the truck.
 b. He loaded the truck with tomatoes.
 c. Il a chargé les tomates sur le camion.
 he loaded the tomatoes on the truck
 d. Il a chargé le camion de tomates.
 he loaded the truck of tomatoes
- (104) a. [_{VP} NP_{AG} charge [_{VP} the tomatoes GO [_{PP} on the truck]]]
 b. [_{VP} NP_{AG} charge [_{VP} the truck V_{TELIC} [_{PP} with tomatoes]]]

(103b, d) では、トラックはトマトを満載していなければならないが、(103a, c) ならばその必要はない。全体性プラス領域の限定の意味を担う要素があれば、トラックは直接目的語の位置に現れ、なければ斜格となると考えられる。しかし、問題はそれほど単純ではない。

まず確認しておかなければならないことは、全体性と完了の解釈が緊密に結びついているということである。全体性（プラス領域の限定）の意味を担う要素がなければ完了解釈はなく、完了解釈がなければ全体性（プラス領域の限定）の意味を担う要素が存在しない。実際、Jackendoff (1996) によれば、次の文が容認可能であると言う。Jackendoff と同じ判断を下す話者の場合、これらの動詞の V_{TELIC} は、任意の要素であることになろう。

- (105) a. Bill sprayed/smeared/dabbed/splashed the wall with paint (for ten minutes), but it still wasn't covered.
 b. ?Bill loaded the truck with dirt for an hour, but there was still room for more.
 c. ?Bill crammed/packed the crack with cement (for five minutes), but it wasn't full.
- (106) [_{VP} [_{VP} NP_{AG} charge the truck] [_{PP} with tomatoes]]

ただ、ここで問題なのは、領域の限定という概念である。Jackendoff(1996)によれば、場所の直接目的語ではなく、付加詞の主題が限定されている (bound-ed) かどうか、完了解釈に影響するという。

- (107) a. Bill loaded the truck with three tons of dirt in/*for an hour.
 b. Bill sprayed the wall with thirty gallons of water in/*for five minutes.

一つの可能性として、主題 NP(道具とも解釈できる)を含む PP が V_{TELIC} の指定部に現れたと考えられるであろう。つまり、locative alternation で、場所の NP が直接目的語となる際には、話者によって、(108)と(109)の二通りの語彙表示を持つとする。(108)が従来言われている解釈であるのに対し、Jackendoff のように(109)の語彙表示を持つ人もいる。(109a)では主題／道具 NP に量の限定がないが、(109b) ならば完了 VP の指定部に現れ得る。

- (108) [_{VP} NP_{AG} charge [_{VP} the truck V_{TELIC} [_{PP} with tomatoes]]] (= (104b))
 (109) a. [_{VP} [_{VP} NP_{AG} charge the truck] [_{PP} with tomatoes]] (= (108))
 b. [_{VP} [_{VP} NP_{AG} load [_{VP} the truck [_{V'} V [_{VP} with three tons of dirt V_{TELIC}]]]]

しかし V_{TELIC} の指定部に実現するのは PP となってしまう、直接内項の位置である VP 指定部には不適切であろう。また‘with three tons of dirt’が完了解釈に関係するとしても、それは文のアスペクトの問題であって、ここで考えているような語彙表示とは切り離して考えるべきである。

もう一つの可能性を探るため、日本語の locative alternation である spray paint hypallage (あるいは「壁塗り代換」とも呼ばれる) について検討する。Kageyama (1980) や奥津 (1981) および川野 (1997) に挙げられている動詞で、全体性と完了解釈の関係を見てみよう。

- (110) a. グラスに水を満たす
 b. グラスを水で満たす
 (111) a. 部屋に菓子をちらかす
 b. 部屋を菓子でちらかす

- (112) a. 腕に包帯を巻く
 b. 腕を包帯で巻く
 (113) a. 壁にペンキを塗る
 b. 壁をペンキで塗る
 (114) a. 壁に花を飾る
 b. 壁を花で飾る

(110-112)は動詞の意味上、どちらの構文であっても全体性ないし広がりのある解釈がなされるが、一般に(113)と(114)において、(b)の「『場所』を『道具』で」形では、「場所」全体に影響が及んでいなければならないとされている。何の文脈もなければ、それが無標の解釈であろうが、状況の設定によっては容易にキャンセルし得るのではないか。³³

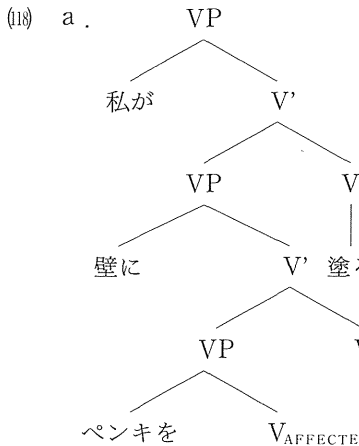
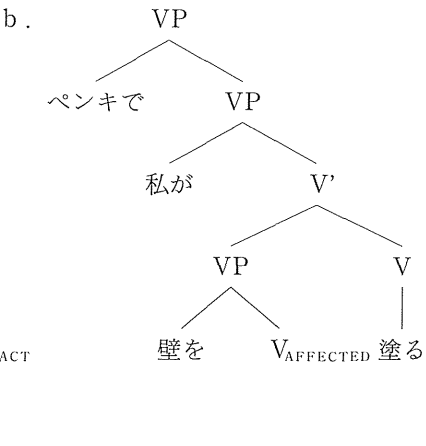
- (115) a. 壁を1リットルのペンキで塗ったが、途中で足りなくなって、まだ塗り残しがある。
 b. この大きな壁をあんな小さな絵で飾っても、空いているところが広すぎて、さびしくなるだけだ。

少なくとも、このタイプの動詞に全体性や完了性を設定するのは難しい。むしろ、「を」格名詞に被影響性があり、通常はその被影響性の一部として、全体性解釈が生じると考えた方がよいであろう。Kageyama (1980) も奥津 (1981) も、場所の「を」格が変化の対象となる主題として分析している点では共通している。Kageyama (1980) は(114)で示したように、二重の Θ 表示を認めつつ、主題役の移転 (Theme Transfer) を仮定することによって、構文の交替を説明し、奥津 (1981) は「塗る」を移動変化動詞と見て、二重の格の枠を設定している。

- (114) a. [Agent] $\left(\begin{array}{c} \text{Theme} \\ \text{Instr.} \end{array} \right)$ [Goal] V
 私が ペンキを 壁に 塗る
 b. [Agent] [Instr.] $\left(\begin{array}{c} \text{Goal} \\ \text{Theme} \end{array} \right)$ V
 私が ペンキで 壁を 塗る

- (17) 付着動詞： 私が 壁に ペンキを 塗る
 <動作主> <目標> <対象>
 |
 変化動詞： <動作主> <対象> <始発> <結果> <手段>
 私が 壁を (白く) ペンキで 塗る

これらの意味分析を本稿の統語表示で表すと、次のようになる。なお Kageyama (1980) で主張されている通り、対象の「ペンキを」は項であるが、道具の「ペンキで」は、付加詞である。

- (18) a.  b. 

従って、英語の locative alternation も以下の表示が適当であろう。

- (19) a. He loaded the tomatoes on the truck.
 $[_{VP} \text{he} [_{V'} \text{load} [_{VP} \text{the tomatoes} [_{V'} V_{AFFECTED} [_{PP} \text{on the truck}]]]]]$
 b. He loaded the truck with tomatoes.
 $[_{VP} \text{he} [_{V'} \text{load} [_{VP} \text{the truck} [_{V'} V_{AFFECTED} [_{PP} \text{with tomatoes}]]]]]$

結論として、 V_{TELIC} の存在は間違いないけれども、locative alternation は完了性とも全体性とも、おそらく無関係である。

2.5 制御

この節の最後に、制御を取り上げる。しかし、動能交替の例も‘ride’しか見当たらなかったのと同様に、制御が出没する構文も少ない。これまでのところでは、ロマンス語の使役が唯一の候補である。Kayne(1975: 239)の挙げた(120a, b)のフランス語で異なるのは、使役補文内の動作主が‘par (by)’による前置詞で表されるか、‘à’という与格表示で表されるかという点である。伝統文法でも指摘されている通り、斜格は間接使役であるのに対し、与格は直接使役を表すのが一般的である。

- (120) a. Marie fera boire cette eau par son chien.
 Marie will-make drink that water by her dog
 ‘Mary will have that water drunk by her dog.’
 b. Marie fera boire cette eau à son chien.
 ‘Mary will have her dog drink that water.’
 (121) a. [_{VP} Mary make [_{VP} [_{VP} drink this water] V] [_{PP} by her dog]]
 b. [_{VP} Mary make [_{VP} [_{VP} drink this water] V [_{VP} this dog-DAT
 V_{CONTROLLED}]]]

使役がどのような構造を持っているのか、ここでは十分な議論をすることはできない。本稿では、使役動詞に制御の要素を任意に付加することができることを指摘するにとどめざるを得ない。

3. まとめ

本稿では、動能交替の分析から五つの要素（接触、影響、全体性、完了、制御）を抽出し、これらの要素が前置詞と交替する操作が存在することを示してきた。このような操作は英語に限らず、スコットランド・ゲール語やフィンランド語、さらには能格言語にも見られた。但し、ロマンス諸語ではこの交替操作が抑制されており、ドイツ語でも厳しい制約の下でのみ可能である。

本稿では論じられなかったが、一般に、ロマンス諸語では生産的な語彙操作が少ないとすべき根拠がある。しかし日本語や英語を含めて、いくつかの構文では動能交替と同じ要素の存在が認められることを明らかにした。

動能構文は他動詞からある語義を削除する操作であると言えるが、逆に別の

要素を追加する語義拡張操作も存在する。例えば、Levin & Rapoport (1988) は次の六つの例を挙げている。

- (122) a. go: The bottle floated into the cave.
 b. create: Frances kicked a hole in the fence.
 c. remove: The company processed the vitamins out of the food.
 d. cause-state: Evelyn wiped the dishes dry.
 e. cause-location: Philip waltzed Sally across the room.
 f. express: Pauline smiled her thanks.

Levin & Rapoport (1988) は上のすべてを語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure) による表示を試みているが、本稿のようにこれを統語的に表すことも可能である。しかし、これは稿を改めて論じなければならない。

注

* 本稿は1998年7月10日に行われた現・現言語学バトルおよびレキシコン研究会における口頭発表の一部に基いている。貴重なコメントを下さったメンバー諸氏に、心から感謝申し上げる。なお、この論文は、筑波大学『東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究』(特別プロジェクト長：原口庄輔)、平成10年度筑波大学学内プロジェクト助成研究(A)「レキシコンの構造と文法に関する総合的研究」(研究代表者：原口庄輔)および平成10年度筑波大学学内プロジェクト奨励研究「フランス語の主要部移動」(研究代表者：中本武志)の助成を受けて行った研究の成果の一部である。またインフォーマントになって下さった John Whitman 氏 (英語)、Roger Martin 氏 (英語)、Jean-Gabriel Santoni 氏 (フランス語)には心から感謝申し上げる。もちろん、本稿の分析は筆者が全責任を負うものである。

¹ 動能交替を許す動詞と許さない動詞の詳細なリストについては、Levin (1993: 41-42) を参照されたい。

² (3, 4, 5) は岡本 (他) (1998) の分析に基いているが、(6, 7) は本稿で新たに追加したものである。

³ 'pull at'は例えば LDCE² では次のように定義されている。

- (i) to seize and pull sharply and repeatedly

類例として'knock (on/at)'がある。LDCE² の解説と用例を一部引用するが、特に

動能構文では、目的語の選択や打撃の目的に制限があることが分かる。

- (ii) a. [(on, at)] to hit a door firmly with esp. one's hand or a knocker, esp. in order to inform the people inside of one's presence: *Please knock (on/at the door) before entering.*
 b. [T] to hit hard: *Don't knock those glasses, they're fragile!* [+obj + adv/prep] *He knocked the fish on the head to kill it quickly. | She knocked a cup off the table.*

- ⁴ 'touch'に関しては、holistic な意味解釈が困難に思われるかもしれないが、van der Leek (1996) は他動詞の'touch'は'full contact'を表し、動能構文の'touch at'は'partial contact'を表すとしている。
⁵ (15a) は直接内項が下位 VP の指定部に現れるという点で、Bowers (1993) の叙述構造や Baker (1996: 226) の厳密 UTAH に近いが、活動動詞や状態動詞が目的語をとる場合には、V を分割すべきかどうか、不明である。さしあたり本稿では、そのような他動詞は次の伝統的な構造を持つとしておく。

(i) [_{VP} NP [_{V'} V NP]]

- ⁶ 例えば、'frapper (hit)'は、他動詞の方が「疑似」動能構文よりも強い打撃を表し、直接目的語も「人」であることが多い。また'battre (beat)'が前置詞を介して目的語をとる時には、主語は自然現象であるのが普通である。'taper'では、直接目的語をとるのは口語表現である。それに対して、'toucher (touch)'や'habiter (live)'が交替を示す場合の意味の違いは非常に微妙で、辞書によっては全く同一視しているものもある。
⁷ フランス語の打撃動詞に関しては中本 (1998a, b) に詳しい分析があるので、岡本 (他) (1998) と合わせて参照されたい。内容を簡単に要約すると、打撃動詞は(i)の構造が基底にあり、(ii)(iii)はそれぞれ、打撃を表す名詞の'coup'および前置詞が編入されるかどうかによる相違である。但し'frapper'以外の動詞では、'coup'は編入されて実現しないのが普通である。

- (i) V-coup-P-NP
 (ii) V-P-NP
 (iii) V-NP

なお、例文を引用する辞書は略語を用いるが、詳しくは本稿末尾のコーパス辞書一覧をご覧ください。

- ⁸ 以下、本稿全体を通して、逐語訳および訳文は出典となる文献をできるだけ尊重するため、しばしば一貫性に欠ける点をあらかじめご了承ください。但し、文法形態素については SMALL CAPITAL を使用し、省略を最小限にとどめる変更は

行っている。

- ⁹ 現代スコットランド・ゲール語では、不定名詞句に属格と直接格の区別がないが、おそらく一世代前までは明確な属格形だったようである。但し、この場合の格については、Ramchand (1997: 99) に別の解釈がある。
- ¹⁰ Ramchand (1997) は句構造の IP と VP の間に AspP をたて、‘ag’や‘air’を支配させる構造を提案している。
- ¹¹ Ramchand (1997: 48) では、‘iarr-’の意味を‘seek to get’と解釈し、行為の完了の時点として‘seek’と‘get’のいずれも可能であり、ゆえに多義性が生じるとしている。しかし、それではなぜ、未完了アスペクトで多義性がないのか、説明がつかない。なお、‘求める」という動作が完了した時、‘求めているものが手に入る」という論理的必然性はない。しかしそのような含意が存在し、且つその含意が文法化されたという言い方も可能であろう。本稿ではその文法化を語義の分割と融合で表していると言ってもよい。注13も参照されたい。
- ¹² 実際には、対格形は代名詞には存在するものの、それ以外の場合は、単数で原則的には属格形を、複数で主格形をとる。しかし一般にこれらは統語的な‘対格’として扱われる。
- ¹³ この動詞の場合、‘見つける」という語義は共通で、単に完了か未完了かの違いではないかと思われるかもしれない。しかし、未完了の‘見つける’動作とは一体どういうものであろうか。そもそも‘見つける」という行為は‘探した結果、目にする・手に入れる」という意味であり、語義の分割は決して ad hoc ではない。日本語にも、‘探す’と‘探し出す’の対が単純動詞と複合動詞に対応しているのと平行している。また、‘探す’という動作が完了した時、探していたものが‘見つかる」という保証はない。しかしそのような含意が存在し、且つ、その含意が文法化されたという言い方も可能であろう。本稿ではその文法化を語義の分割と融合で表していると言ってもよい。注11も参照されたい。なお、フィンランド語の‘見つける」という動詞には‘löytää’などがある。
- ¹⁴ もちろん、すべての目的語の格表示がこれで説明できるわけではない。まず(i)に見られるように、否定文では、対応する肯定文の目的語が対格であっても分格になる。形式的には、否定動詞に後続する動詞語幹では格を付与できず、代わりに否定動詞が分格を与えうるであろうが、結果・完了の効果が消去されてしまうためもあるかもしれない。フランス語の目的語につく不定冠詞および部分冠詞が否定文で‘de’と交替する(ii)の現象を思わせ、興味深い。(42)の不定の数量を表す分格と何らかの関係があるかもしれないが、現段階では不明である。

- (i) a. Silja joi maidon.
Silja drank milk-ACC
‘Silja drank (up) the milk.’
b. Silja joi maitoa.
Silja drank milk-PART
‘Silja drank (some) milk.’

- c. Silja ei juonut maitoa.
 Silja NEGV drink milk-PART
 'Silja didn't drink the/any milk.'
- (ii) a. J'ai bu du lait.
 I-have drunk some milk
 'I drank some milk.'
- b. Je n'ai pas bu de lait.
 I NEG-have not drunk *de* milk
 'I didn't drink milk.'

また肯定命令文では対格(形態上は主格と同じ)が与えられる。動詞の格付与よりも法による格表示が優先されることになる。最適性理論(Optimality Theory)の枠組みで言えば、動詞の格付与は法の格付与よりも優先順位のランクが低いのである。但し、否定命令文では分格である。

- (iii) a. Lue tämä kirja.
 read this book-ACC
 「この本を読みなさい」
- b. Älä käytä tätä nenäliinaa.
 don't use this handkerchief
 「このハンケチを使ってはいけない」

さらに、不定詞の目的語は主節要素に依存する。不定詞が主節の主語(を修飾する節)であれば、形態上は主格と同じ対格を、不定詞が主節の目的語であれば形態上は属格と同じ対格を、命令文の目的語であれば形態上は主格と同じ対格を、それぞれ付与される。いずれも格表示は不定詞ではなく、主節の動詞ないし Infl によることが分かる。

- (iv) a. On hauska saada hyvä ystävä.
 be-(3SG) nice get-1INF good-(ACC) friend-(ACC)
 'It is nice to get a good friend.'
- b. Pauli käski Marja-Liisan ostaa talon.
 Pauli ask-IMPF-(3SG) Marja-Liisa-GEN buy-1INF house-ACC
 'Pauli told Marja-Liisa to buy a house.'
- c. Anna Marjan ostaa auto.
 let-(IMP-2SG) Marja-GEN buy-1INF car-(ACC)
 'Let Marja buy a car.'

しかし不定詞の目的語であっても、不定の数量を表したり、未完了の行為であったり、さらには主節が否定文であると、再び分格が出現する。

- (v) a. Äiti käski minun ostaa maitoa.
mother ask-IMPf-(3SG) I-GEN buy-1INF milk-PART
'Mother asked me to buy some milk.'
- b. Äiti antoi minun ommella hametta.
mother let-IMPf-(3SG) I-GEN sew-1INF skirt-PART
'Mother let me sew the skirt.'
- c. Äiti ei käskenyt minun ostaa autoa.
mother NEG-(3SG) ask-2PTC I-GEN buy-1INF car-PART
'Mother didn't ask me to buy a car.'

やはり絶対的な格付与子を決めておくよりも、最適性理論の考え方を採用して、格付与子に優先順位があり、状況によって与えられる格が異なるとした方がよいであろう。

なお、例文は(i)を Karlsson (1987: 79) から、(iii)を小泉 (1983: 155) から、(iv)(v)を Sulkala & Karjalainen (1992: 221-2) から、借用した。そのため訳語・訳文が一定しなくなったことをお詫びする。

- ¹⁵ 小田 (1991) で挙げられているすべての文について、筆者と判断が異なるわけではない。以下の文などは筆者も容認する。

- (i) 私たちは県の農林漁業祭で町の特産品を売りましたが売れませんでした。
(ii) 今晩は風呂をわかしましたが、未だわいていません。

- ¹⁶ この例文は Benua (1995) が Tarpent (1982) から引用したものであるが、原典は参照できなかった。

- ¹⁷ Baker (1988) の仮説を(i)に、Bittner & Hale (1996) の分析を(ii)に掲げる。

- (i) $[_{VP} [_{PP} P NP_i] [_{NP} t_i] [_{V} V-N_i]]$
(ii) $[_{VP} KP_{OBL} [_{V} V-N_{A-PASS}]]$

どちらも逆受動形態素を N とし、それが語彙的に V に編入されていると分析している。両者の提案を組み合わせ、次のような構造をたてることもできよう。

- (iii) a. $[_{VP} NP_{ERG} [_{V'} [_{VP} NP_{ABS} \text{seen}] \text{wait}]]]$
b. $[_{VP} NP_{ABS} [_{V'} PP/KP_{OBL} \text{wait-N}]]]$

しかし、逆受動の精密な考察は本稿の目的ではなく、いずれの構造にしても、他動詞構文における下位の VP が、逆受動で失われることが表示できればよい。

- ¹⁸ 動詞により、どの形態素を用いて逆受動態を形成するかは決まっていることが多いが、複数の逆受動形を持つ動詞も少なくない。

- ¹⁹ 残念ながら、筆者は未見である。

- ²⁰ Levin (1993: 41) では、‘chop’は動能交替をしない動詞として扱われているが、LDCE² には、動能構文では結果の含意がないことを示す例文が挙げられている。

- (i) I chopped a branch off the tree.
 (ii) I have been chopping away (at the tree) for half an hour but it's still standing.

- ²¹ P の編入先を仮に‘want’としたが、上位の V と‘want’は編入によって単一動詞となるので、実際に、どちらの動詞に逆受動が適用されたかは、重要ではない。

- ²² 動能構文の PP は間接内項で、付加詞とは異なる。しかし、能格言語における逆受動態では、目的語 NP は付加詞となつて、省略可能である。直接内項、間接内項、付加詞は連続体を成すが、間接内項自体にも動詞によって、直接内項に近いものと、付加詞に近いものがあるように思われる。この点については、なお検証が不十分であるので、将来の研究課題としておきたい。

- ²³ 但し、(70)の後に、それぞれ次のように続けることができる。

- (i) a. ..., ne sachant pas qu'elle est rentrée en Europe depuis un an.
 NEG knowing not that-she is returned to Europe since a year
 ‘..., not knowing that she returned to Europe a year ago’
 b. ..., mais finalement il ne l'a pas acheté parce que le magasin était fermé
 but finally he NEG it-has not bought because the shop was shut
 ‘..., but after all he didn't buy it because the shop was closed.’

おそらく、移動動詞は移動+到着を表すのが無標であり、従つて、補部の不定法動詞は着点役を表示されるのだが、文脈により、到着の解釈が現れず、原形動詞が方向を表すことになるのであろう。「行く」の分析になつて、最適性理論の記述法を採用すると、次のようになる。

- (ii) 文脈による「到着」削除 ≧ 「移動+到着」解釈 ≧ 「移動」のみの解釈

- ²⁴ Vergnaud (1974) は、‘à’が格表示子であつて、前置詞とは異なる根拠として、次の二つを挙げている（英訳は中本による）。

1. ‘à NP & à NP’が関係節の先行詞となる。

- (i) a. *Il compte sur l'homme et sur la femme qui se sont rencontrés hier.
 he counts on the-man and on the woman that REFL are met yesterday
 ‘He counts on the man and the woman who met each other yesterday.’
 b. Il écrit à l'homme et à la femme qui se sont rencontrés hier.

he writes to the-man and to the woman that REFL are met yesterday
 'He writes to the man and the woman who met each other yesterday.'

2. 等位接続構造で、二番目の'a'を省略できない。
- (ii) a. Ils ont parlé avec Marie et le directeur.
 they have spoken with Marie and the director
 'They spoke with Marie and the director.'
- b. Ils ont parlé à Marie et au/*le directeur.
 they have spoken to Marie and to-the/the director
 'They spoke to Marie and the director.'

25 その他に、'à NP'には与格接語代名詞があるが、他の PP には対応する接語形がないことが挙げられよう。なお、'de (of) NP'は'a NP'と同じ振る舞いをする。この場合の'a'が前置詞ではなく、与格表示子であることの根拠として、動詞による構造格であって、固有格ではないこと、そして束縛範疇に関わる現象が挙げられる。以下、Masullo (1992) の例で検証しよう。

まず構造格であるという証拠は名詞化に見ることができる。名詞は固有格しか付与できないとすると、与格は現れないはずであり、事実その通りである。つまり、'a NP'は対格 NP と同じ振る舞いをするのである。

- (i) a. Compraron libros para los estudiantes.
 they-bought books for the students
- b. Le compraron libros a los estudiantes.
 to-them they-bought books to the students
 'They bought books for the students.'
- (ii) La compra de libros para/*a los estudiantes
 the buying of books for/to the students

次に束縛範疇に関する現象であるが、一般に PP は束縛範疇になることができ、同一節内の主語が先行詞である時、P の補部は代名詞でも照応形でもよい。それに対して'a NP'では、同じ状況では照応形のみ可能である。

- (iii) a. Juan_i compró un regalo para sí mismo_i
 John bought a present for himself
- b. Juan_i compró un regalo para él (mismo)_i
 John bought a present for him (self)
- (iv) Juan_i se compró un regalo a sí/*él (mismo)_i
 John REFL bought a present for self/him (self)
 'John bought a present for himself.'

Masullo (1992) は接語代名詞を一致形態素と考えており、これが構造格の特徴であるとして、‘a NP’と共起する与格接語の存在がまさに与格‘a NP’の構造格であることを示していると述べている。

²⁶ 本稿では詳しく触れる余裕がないが、 V_1 は動作主付与の、 V_2 は移動を表す動詞要素である。

²⁷ Roger Martin 氏 (p. c.) の指摘による。

²⁸ (84)および(85)に関しては、Chomsky (1955/1975: 562-564) と Davison (1980) を参照されたい。

²⁹ Levin & Rappaport Hovav (1995: 269-270) は、非対格動詞であるかどうかという判断を留保している。他の分析の可能性については同書を参照されたい。

³⁰ 移動を表す要素等が付加されたことによる語義の拡張については、本稿では扱わない。Levin & Rapoport (1988) 等を参照のこと。

³¹ Tenny (1994: 107) より引用した。

³² Jackendoff (1996: fn. 19) は、次のようにリングが丸ごと食べられてはいない解釈が可能であるとしているが、これを認めない話者もいることに注意すべきである。

- (i) What is only occasionally noted in the literature is that Bill may be taking bites indiscriminately from random apples, in which case he is not eating one apple after another.

あるインフォーマントによれば、このような意味では動能構文を用いて、‘Bill ate at apples.’と言うとのことである。

³³ 完了解釈についても、キャンセル可能であるように思われる。

- (i) 1時間、壁をペンキで塗ったが、途中でやめてしまった。
 (ii) 急に客が来ることになって、玄関を花で飾ったが、飾りきれなかった。

参考文献

- Anderson, Mona. 1979. *Noun phrase structure*, Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs.
 Baker, Mark. 1988. *Incorporation: A theory of grammatical function changing*, University of Chicago Press, Chicago.
 ———. 1996. *The polysynthesis parameter*, Oxford University Press, Oxford.
 Benua, Laura. 1995. “Yup’ik antipassive,” *CLS* 31, 28-44.
 Bittner, Maria. 1987. “On the semantics of the Greenlandic antipassive and related constructions,” *International Journal of American Linguistics* 53, 194-231.
 ———. 1988. *Canonical and noncanonical argument expressions*, Doctoral disser-

- tation, University of Texas, Austin.
- Bittner, Maria and Ken Hale. 1996. "The structural determination of Case and agreement," *Linguistic Inquiry* 27(1), 1-68.
- Bolinger, Dwight. 1975. "On the passive in English," *LACUS* 1, 57-80.
- Bowers, John. 1993. "The syntax of predication," *Linguistic Inquiry* 24(4), 591-656.
- Carrier, Jill and Janet H. Randall. 1992. "The argument structure and syntactic structure of resultatives," *Linguistic Inquiry* 23(2), 173-234.
- Chomsky, Noam. 1955/1975. *The logical structure of linguistic theory*, Plenum Press, New York.
- Davison, Alice. 1980. "Peculiar passives," *Language* 56(1), 42-66.
- Egerland, Verner. 1998. "The affectedness constraint and AspP," *Studia Linguistica* 52(1), 19-47.
- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Hanse, Joseph. 1987. *Nouveau dictionnaire des difficultés du français moderne, deuxième édition mise à jour et enrichie*, Duculot, Paris.
- Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic structures*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- . 1995. "The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification in English," *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 305-354.
- Jayaseelan, K. A. 1988. "Complex predicates and θ -theory," in Wendy Wilkins ed., *Syntax and semantics 21: Thematic relations*, Academic Press, San Diego, California, 91-111.
- Kageyama, Taro. 1980. "The role of thematic relations in the *spray paint* hypallage," *Papers in Japanese Linguistics* 7, 35-64.
- 影山太郎. 1993. 『文法と語形成』 ひつじ書房. 東京.
- Karlssohn, Fred. 1987. *Finnish grammar*, 2nd edition, translated by Andrew Chesterman, Werner Söderström Osakeyhtiö, Helsinki.
- 川野靖子. 1997. 「位置変化動詞と状態変化動詞の接点—いわゆる「壁塗り代換」を中心に—」筑波大学 文芸言語研究科 日本語学教室『筑波日本語研究』2, 28-40.
- Kayne, Richard S. 1975. *French syntax: The transformational cycle*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Keyser, Samuel J. and Thomas Roeper. 1984. "On the middle and ergative constructions in English," *Linguistic Inquiry* 15(3), 381-416.
- 小泉 保. 1983. 『フィンランド語文法読本』大学書林, 東京.
- Lamiroy, Béatrice. 1983. *Les verbes de mouvement en français et en espagnol: Etude comparée de leurs infinitives*, John Benjamins, Amsterdam.
- Larson, Richard. 1988. "On the double object construction," *Linguistic Inquiry* 19(2), 335-392.
- Laughren, Mary. 1988. "Toward lexical representation of Warlpiri verbs," Wendy

- Wilkins ed., *Syntax and semantics 21: Thematic relations*, Academic Press, San Diego, California, 215-242.
- van der Leek, Frederike. 1996. "The English conative construction: A compositional account," *CLS* 32, 363-378.
- Legendre, Géraldine. 1993. "Antipassive with French psych-verbs," *WCCFL* 12, 373-388.
- . 1994. *Topics in French syntax*, Garland, New York.
- Levin, Beth. 1993. *English verb classes and alternations: A preliminary investigation*, University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
- Levin, Beth and Tova R. Rapoport. 1988. "Lexical subordination," *CLS* 24, 275-289.
- Masullo, Pascual Jose. 1992. *Incorporation and Case theory in Spanish: A cross-linguistic perspective*, Ph. D. Dissertation, University of Washington.
- 三原健一. 1998. 「数量詞連結構文と「結果」の含意」(上)(中)(下)『月刊言語』28(6) 86-95, (7) 94-102, (8) 104-113.
- 中川正之. 1992. 「類型論から見た中国語・日本語・英語」大河内康憲(編)『日本語と中国語の対照研究論文集(上)』くろしお出版, 東京, 3-21.
- 中本武志. 1998a. 「フランス語の「打撃」を表す語彙の表示」筑波大学『東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究』平成9年度研究成果報告書(Part I), 217-236.
- . 1998b. 「フランス語の衝撃編入動詞」筑波大学 現代語・現代文化学系紀要『言語文化論集』48, 101-118.
- 小川洋通. 1981. 「英語の受動態」『富山大学教養学部紀要』29, 145-156.
- 岡本順治・佐々木勲人・中本武志・橋本修・鷲尾龍一. 1997. 「打撃・接触動詞の動能交替と結果の含意」筑波大学『東西言語文化の類型論特別プロジェクト研究』平成9年度報告書(Part I), 173-192.
- 奥津敬一郎. 1981. 「移動変化動詞文—いわゆる spray paint hypallage について—」『国語学』127, 48-60. (『拾遺日本文法論』1996. ひつじ書房, 東京, 251-266.に再録)
- 小田朗美. 1991. 「「切りましたが切れませんでした構文」と対応英語構文の動詞の意味的・統語的特徴について」『ノートルダム清心女子大学紀要』vol. 15(1), 1-12.
- Pinker, Steven. 1989. *Learnability and cognition: The acquisition of argument structure*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Pustejovsky, James. 1995. *The generative lexicon*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Ramchand, Gillian C. 1997. *Aspect and predication: The semantics of argument structure*, Clarendon Press, Oxford.
- Rizzi, Luigi. 1986. "Null objects in Italian and the theory of pro," *Linguistic Inquiry* 17(3), 501-557.
- Ross, John. 1973. "Nouniness," in Osamu Fujimura ed., *Three dimensions of linguistic theory*, TEC, Tokyo, 137-257.

- Sulkala, Helena and Merja Karjalainen. 1992. *Finnish*, Routledge, London.
- Talmy, Leonard. 1975. "Semantics and syntax of motion," in John P. Kimball ed., *Syntax and semantics 4*, Academic Press, New York, 181-238.
- . 1985. "Lexicalization patterns: Semantic structure in lexical forms," in Timothy Shopen ed., *Language typology and syntactic description 3: Grammatical categories and the lexicon*, Cambridge University Press, Cambridge, 57-149.
- Tarpen, M. L. 1982. "Ergative and accusative; A single representation of grammatical relations with evidence from Nisgha," *Working papers of the linguistic circle of the University of Victoria (WPLC)* 2, 50-106.
- Tenny, Carol L. 1994. *Aspectual roles and the syntax-semantics interface*, Kluwer, Dordrecht.
- Vendler, Zeno 1967. *Linguistics in philosophy*, Ithaca, N. Y., Cornell University Press.
- Vergnaud, Jean-Roger. 1974. *French relative clauses*, Doctoral dissertation, MIT.
- Vinay, J. P. et J. Dalbérnet. 1977. *Stylistique comparée du français et de l'anglais: méthode de traduction*, Nouvelle édition revue et corrigée, Didier, Paris.
- Washio, Ryuichi. 1997. "Resultatives, compositionality and language variation," *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.
- 安井 泉. 1983. 「英語の受動文について」筑波大学 現代語・現代文化学系紀要『言語文化論集』15, 69-89.

コーパス辞書

- DES: *Diccionario de uso del Español*, Madrid, Gredos, 1975.
- DLCIC: *Il dizionario della lingua e della civiltà italiana contemporanea*, Napoli, Palumbo, 1985.
- GR: *Le Grand Robert de la langue française, dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*, 2^e édition, 9 vol., Paris, Le Robert. 1985.
- LDCE²: *Longman dictionary of contemporary English*, New ed., Harlow, Essex, England, Longman, 1987.
- LDF: *Dictionnaire de français*, Paris, Larousse. 1987.
- OALD⁴: *Oxford advanced learner's dictionary of current English*, 4th ed., Oxford, Oxford University Press, 1989.
- OED²: *The Oxford English Dictionary*, 2nd ed., Oxford, Clarendon Press, 1989.
- PLANETA: *Diccionario PLANETA de la lengua española usual*, Barcelona, Planeta, 1982.
- Webster³: *Webster's Third new international dictionary of the English language*, Springfield, Mass., G. and C. Merriam, 1966.